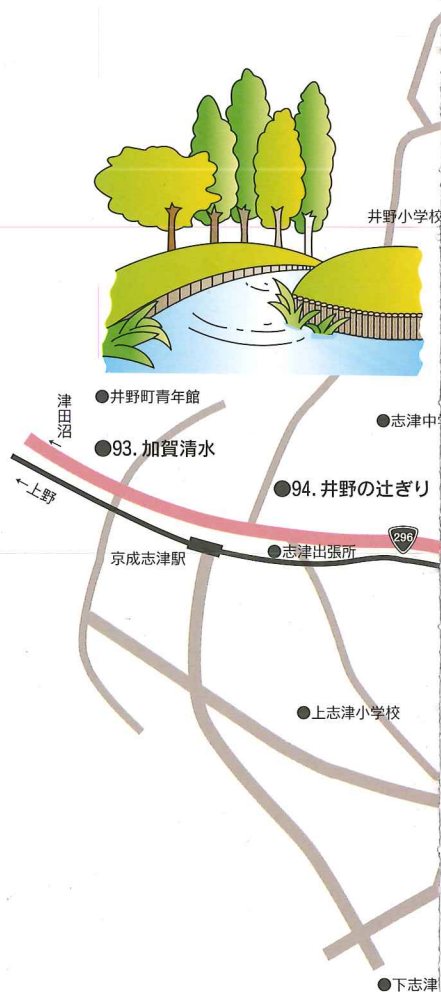
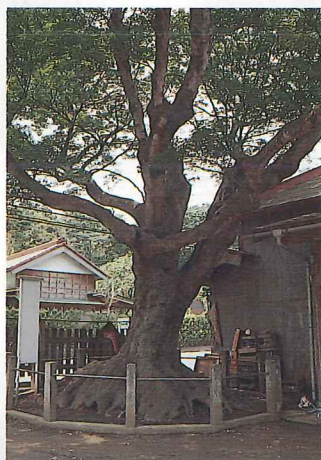


古い伝承の残る先進的なまち

【志津地区】

- 84. 小竹城跡(小竹).....82
- 85. 称念寺のムクロジ(青菅).....82
- 86. 先崎地藏尊(先崎).....83
- 87. 鷺神社本殿(先崎).....83
- 88. 鷺神社鳥居(先崎).....84
- 89. 鷺神社のケヤキ(先崎).....84
- 90. 上座貝塚(上座).....85
- 91. 飯郷作遺跡(下志津).....85
- 92. 井野長割遺跡(井野).....86
- 93. 加賀清水(井野).....86
- 94. 井野の辻ぎり(井野).....87
- 95. 千手院(井野).....87
- 96. 金銅五鈷杵(井野).....88
- 97. 刀 銘細川忠義(上志津).....88
- 98. 刀 銘細川忠正(上志津).....89





84

おだけじょうあと 小竹城跡



なかうち

小竹の中内という地にある小竹城跡は、変形の五ないし六角形をした単郭構造の城郭です。その規模は南北約75m、東西約85mで、曲輪の周囲には高さ3mほどの土塁と空堀がほぼ全体に巡っています。また、曲輪の内部はハードローム面まで削り出されているため、外側の台地より一段低くなっています。

出入口の虎口は曲輪南側の中央にあります。その前面には現状で高さ1.5mほどある土塁が構築され、虎口の外側から内側を見通すことのできない構造となっています。

白井城跡の西方に位置するこの小竹城跡からは12～16世紀代の遺物が採集されていますが、現在残されている遺構は、原氏が白井城主にあった16世紀中頃から後半の時期のものと考えられます。

白井氏の庶流小竹氏は、鎌倉時代から室町時代にわたり白井氏の家臣として系図に確認できます。また、小竹五郎高胤おだけごろうたかたねは小竹城主であったという伝承も残されています。しかし、確実な史料からこれらの事を明らかにすることは、現時点ではできません。



85

しょうねんじ 称念寺のムクロジ

ムクロジは、ムクロジ科ムクロジ属に属する南方系の落葉高木で雌雄同株です。サポニンを含む果実は石鹸の代用とされ、種子は数珠や羽根つきの羽根玉として利用されます。

青菅あおすげの浄土宗本然山称念寺境内にあるムクロジは樹高22.5m、目通り幹囲4.6mの大樹であり、この地における巨木として貴重な存在です。このムクロジは、天正5年(1577)に称念寺が創建された際、初代住職が開山記念としてタラヨウ、イチチョウなどととも境内地に植樹したものと伝えられており、歴史的にも価値の高いものと考えられます。

※現在、一般には公開していませんので、ご注意下さい。





まっさきじぞうそん 先崎地蔵尊



あおすげ じょうど ほんねん しょうわん
青菅の浄土宗本然山称念寺から西に向か
い、小竹川にかかる子ノ橋を渡ると先崎城跡
に突き当たります。その崖下の辻に小さなお
堂があり、堂の中には慶安3年(1650)に造
立された合掌姿の石仏が祀られています。こ
れは、高さ90cmの丸彫りの地蔵菩薩坐像で、
次の銘文が刻まれています。

慶安三天

庚寅二月廿四日

本願友野河内

奉造立庚申人数廿五人

先崎村

まっさき とものかわち こうしんけつしゅう
先崎村の友野河内を本願主として庚申結衆

25人によって造立されたこの地蔵菩薩から、
江戸時代前期に地蔵信仰と庚申信仰の習俗が
結合していた例がわかり、大変珍しいものとな
っています。

また、現在でも地元の数人により講が維持
され、毎月24日の地蔵縁日には地蔵菩薩の真
言が誦えられています。



わしじんじゃほんでん 鷲神社本殿

まっさき
先崎の鷲神社の創建年代は不明ですが、享
保7年(1722)成立の『佐倉風土記』には、
祭神は明らかではない。承平7年(937)7
月7日に朱雀天皇の勅命により慈恵僧正が創
建し平将門の悪行を取り除いた。行基菩薩作
の釈迦如来像を安置し鷲峰の名に因んで鷲宮
と呼ぶ。応永年間(1394~1428)の火災で一
切の記録が失われた。天日鷲命を祭るのでは
ないか。と記しています。鷲神社の別当は真
言宗鷲王山正覚寺鷲福院でした。井野の千手
院の末寺であった正覚寺は、幕府から鷲神社
領(祭田)5石を与えられていました。

現在の本殿は正覚寺照永の時代、天保15年
(弘化元年、1844)の建立で、大工棟梁は下
高野村(八千代市)の立石菊右衛門元隆です。
また、向拝柱の昇り龍・下り龍や壁面の丹波
国大江山の酒吞童子退治伝説を題材とした彫
刻は上野国勢多郡花輪(群馬県)の彫工星野
理三郎政一之作で、その優れた技巧は注目さ
れます。本殿の台座には、建立資金を奉納し
た人名が刻まれている、先崎村以外の近隣
村々の人名も多く見られます。





88

わしじんじゃとりい 鷲神社鳥居



先崎の鷲神社の石鳥居は、江戸時代中期の寛文13年（延宝元年、1673）に造立された、明神鳥居に分類される鳥居です。台石から笠木までの高さが3.88m、笠木幅は5.77mで、石鳥居としては市内でも大きいものです。

鷲神社の別当であった真言宗鷲王山正覚寺鷲福院の住職定宥が、江戸深川の石屋五郎兵衛に注文したことが、刻まれた銘文からわかります。

(右柱銘) 本願目宥法印

奉新造立石鳥居一字天下太平国土安全之依
建立主 定宥

(左柱銘) 寛文十三癸丑天

下総国葛飾郡莊内莊先崎村鷲王山正学寺鷲福院
江戸 深河

石屋五郎兵衛 作

六月吉日



89

わしじんじゃ 鷲神社のケヤキ

ケヤキはニレ科ケヤキ属に属する落葉高木で、本州全土、四国、九州などの暖地に広く分布しています。強靱であるとともに美しい木目を持つことから大建築の資材として広く利用されます。

先崎の鷲神社境内地にあるケヤキは、樹高16m、目通り幹囲6.3mの古木です。『佐倉風土記』では鷲神社は平安時代の承平7年(937)に創建されたとされているので、このケヤキが神木として創建とともに植えられたものとする、古木としてはもちろん、学術的にも貴重なものと考えられます。

老樹のため幹の内部は空洞となつてはいるものの樹勢は衰えてはいません。神殿に面した幹の北側部分は、応永年間(1394~1428)の神社火災により被災し、枯死したと伝えられます。境内には、このケヤキのほかスギの巨木が立ち並んでおり、神社の歴史の古さを今に伝えていきます。





90

しょうざかいづか 上座貝塚



上座貝塚は、印旛沼に注ぐ井野川によって削られた海拔約25mの台地上に位置する縄文時代早期の小貝塚群です。京成電鉄の軌道により南側のA地区（県指定史跡範囲2,235㎡、壹番原児童公園）と北側のB地区に分断されています。昭和32年（1957）5月に明治大学考古学研究室によりA地区の発掘調査が行われ、昭和61年（1986）、平成9年（1997）、平成10年（1998）には佐倉市教育委員会がB地区を発掘調査しています。

明治大学の調査では、竪穴住居跡2軒と火を炊いた炉穴7基が発見され、縄文時代早期後半の土器が出土しました。住居跡に炉はなく、屋外の炉穴で調理をしていたようです。楕円形の炉穴は長径約2m・短径約1mの規模で、深いものには煙を出すための煙道を備え炉穴の機能を明らかにしたものがありません。

貝塚は、使われなくなった竪穴住居跡や炉穴などの窪みに捨てられた貝殻が溜まったものです。住居跡と炉穴の関係をj知る上で注目される上座貝塚は、発育の良くないマガキやハイガイを主体にオキシジミ・ハマグリ・シオフキなど海水産の貝類で構成されていて、当時はこの周辺にも海が迫っていたことがわかります。



91

いいごうさくいせき 飯郷作遺跡

手繰川の西岸にある飯郷作遺跡は、県立佐倉西高等学校の新設に際し、昭和51年（1976）から翌52年にかけて千葉県文化財センターにより発掘調査が行われました。その結果、前方後方墳2基、方墳2基、方形周溝墓23基のほか、縄文時代早期の炉穴、弥生時代後期から平安時代にかけての竪穴住居跡109軒などが検出されました。このうち古墳時代前期に築造されたと考えられる前方後方墳1基（2号墳）、方墳2基（3号墳・4号墳）、方形周溝墓5基（D01～D05）が校庭に現状保存されています。これら墳墓は周溝を共有し、最初に2号墳が築造され、次に3号墳・4号墳が張り付くように築造され、最後にその回りに方形周溝墓が築造されたものです。全長30mの前方後方墳2号墳と全長25mの前方後方墳1号墳の被葬者は当地方の盟主であったと考えられ、1号墳の埋葬施設からはガラス小玉が3個、盛土中からは銅鏃が出土しました。

飯郷作遺跡は、古墳時代の前方後方墳・方墳と弥生時代の墓制の流れをひく方形周溝墓とが一連の関係をなしている全国的にも珍しい例であり、墓制の変遷を知る上で重要な意義を持っています。





92

いのながわりいせき 井野長割遺跡



現在の井野小学校の周辺に広がる縄文時代後・晩期の集落跡です。昭和40年代に小学校の建設及び増築に先だって発掘調査が実施され、その後も数度の調査が行われています。

小学校の建設に伴う調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡3軒とともに縄文土器（後・晩期）の破片を多量に集積したマウンド状遺構（土器塚）が発見されました。

発見された住居跡の1軒からは異形台付土器2点が出土しました。この土器は、形が容器として使うには適していないことから祭祀に使用されたと推定されています。また、土器塚からは異形台付土器に類似した香炉形土器が出土しました。この土器には吊手がついており、その他多くの土器とは異なった使い方が考えられます。



93

かがしみず 加賀清水

井野にある加賀清水の名は、延宝6年（1678）から貞享3年（1686）まで佐倉藩主であった大久保加賀守忠朝が、江戸参府の際に、いつもこの清水を賞味していたことに由来するといわれます。享保7年（1722）成立の『佐倉風土記』には「井野清水」として「加賀殿清水、近改今名焉」と記しています。この湧水地は加賀殿清水、井野清水、加賀清水と呼称を変えながら現在まで残されてきました。

天保年間（1830～44）ころには、近くの茶屋の林屋がこの清水を使用した茶湯を飲ませ、繁盛したそうです。林屋には歌舞伎の名優7代目市川團十郎も立寄ったといわれます。成田道沿いには團十郎が41歳の時、天保2年（1831）に造立した高さ1.21mの道標があり、成田山及び加賀清水の所在が刻まれています。また、石碑にはこの清水を飲めば、子供のない御婦人も懐胎するという加賀清水のご利益とともに次の俳句が陰刻されています。

天はちち地はかかさまの清水かな

母親（かか様）と藩主であった加賀様をかけて詠っており、七代目団十郎の清水への傾愛を伺うことができます。





いの つじ 井野の辻ぎり



市の西部にある井野に辻ぎりという行事が伝承されています。これは、毎年1月25日に藁で作った大きな蛇を村境の木の上に取り付けて睨みをきかせ、災厄や疫病などが外部から侵入するのを遮ることを目的とした民俗行事です。

蛇はおおつじ大辻とこつじ小辻の2つを作ります。全長2間半ほどの大辻は、村境6か所の木に掛け、9尺ほどの長さの小辻は各戸の戸口に掛けます。この蛇を作るには、昔からのいくつかの決まりがあり、「ネンバン」又は「ヤド」と呼ばれる家が世話係となり行われます。大辻は頭部と胴を別々に作り、力のいる胴を擦る作業は4人が力を合わせて擦りあげます。頭部には串にさした塞神のお札を付け、目玉はオビシャの時に分けられた米・麦・粟・稗・豆の五穀を炒り、これを和紙に包んで5cmほどの円径にしたものに墨で黒目を入れたものです。また、大きく裂けた口からは唐辛子の真っ赤な舌がのぞいています。

県内でも蛇を掛ける辻ぎりは、ここ井野と市川市や船橋市の旧村に伝わるだけで、重要な伝統行事といえます。



せんじゅいん 千手院

井野にあるいの稲野山いの千手院は、千手観音を本尊とするしんこん真言宗ぶざん豊山派てんびょうの寺院です。天平年間(729~49)にうすいしかな臼井石神いなりだい(稲荷台4丁目)に創建されてれんげおう蓮華王院こんこうほんにん金剛般若寺と号し、のち明徳3年(1392)におだけ僧澄秀が兵乱に遭うことを恐れ、さうたかなわ大檀那のおだけ小竹五郎高胤に願って当地に移転し、千手院と改称したと伝えられます。醍醐さんぼう三宝院、のち長谷寺の末寺でした。

幕府から寺領30石を与えられ、佐倉市の正覚寺(先崎)・普門院(羽鳥)・専栄寺(生谷)・大聖院(鑄木町)、八千代市の正覚院(村上)・東栄寺(保品)・貞福寺(吉橋)、習志野市の無量寺(実初町)、市川市の安養寺(高谷)、沼南町の来福寺(手賀)、四街道市の蓮花寺(栗山)・善光寺(鹿渡)、印旛村の満福寺(吉田)・広福寺(師戸)、船橋市の覚王寺(本町)・延命院(西船)・正覚寺(西船)・明王院(古作)を末寺とし、佐倉市の西福寺(小竹)・正福寺(青菅)・西福寺(上志津)、八千代市の福蔵院(下高野)・金乗院(上高野)・玉蔵院(神野)・西福寺(米本)・林照院(米本)・妙光院(米本)、印旛村の泉福寺(岩戸)、四街道市の不動院(山梨)・福寿院(鹿渡)・東光院(鹿渡)を門徒としていました。





96

こんどうごこしよ
金銅五鈷杵



いの いの せんじゆ みつきょうほうぐ こんこうしよ
井野の稲野山千手院の密教法具に、金剛杵
のひとつ、総長23.3cm、把手長8.2cm、鈷長
6.8cmの金銅五鈷杵があります。古代インド
の武器に由来する金剛杵は、密教の修法のと
きに金剛盤の上におき壇上に配するものです。

千手院の金銅五鈷杵は、把手の中央部は台
形を組み合わせた十六面切子形で、各面に宝
珠形のくぼみを打ち込んでいます。両端の鈷
(切先)は、八角の中鈷の下方に三本一組の
段飾をもうけ、脇鈷の外縁3か所に雲形を付
けています。

京都東寺の国宝くわがいに こんぼうだいし空海(弘法大師)請来品の
金銅五鈷杵(雲形五鈷杵)に比べ、把手と鈷
の接続部を四角形として蓮弁飾のシベを簡略
化している点に製作年代の下降が感じられま
す。



97

かたな めいほそかわただよし
刀 銘細川忠義

けいおう
慶応3年(1867)細川忠義が53歳のときに
鍛えた刀です。忠義は明治3年(1870)に56
歳で死去しましたので、晩年の作にあたります。

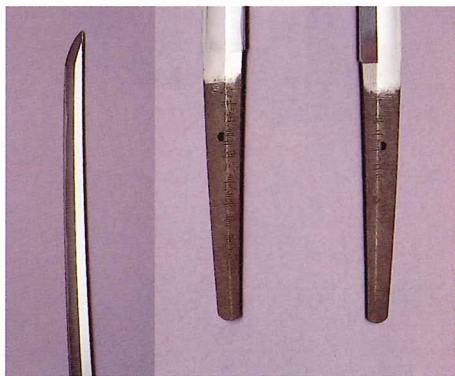
刀は長さ71.5cm、反り1.2cmの鎌倉時代の
太刀姿で、刃文は忠義の得意とする備前伝を
焼いています。忠義の典型的な作風を示した
一振りです。なかご茎には次の銘が刻まれています。

(表銘) 総刃佐倉臣細川忠義造之

(裏銘) 慶應三年二月日



かたな 刀
めいほそかわただまさ 銘細川忠正



細川忠義の長男忠正げんじが元治2年けいおつ（慶応元年、1865）29歳のときに鍛えた刀です。刀は長さ72cm、反り1.3cmで、身巾の広い幕末期に流行した勤皇党体配です。

茎なかこには次の銘が刻まれています。

（表銘）総州佐倉士細川長壽軒忠正作

（裏銘）元治二年二月日

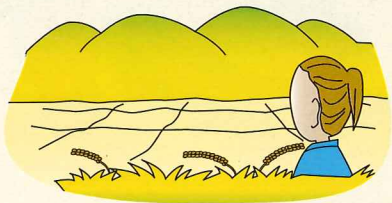
天保8年（1837）に江戸神田で誕生した忠正は、13歳のときに父忠義と一緒に佐倉へ移住しました。後、弟義則に跡目を譲り、万延（1860）以降、延岡、飢肥、都城など日向国（宮崎県）内で駐錫しています。忠正の没年は不明ですが、明治29年（1896）60歳のとき注文により宮崎県の都農神社の奉納刀を鍛えています。

佐倉惣五郎は成田市民!?

日本全国に、「佐倉といえば、佐倉惣五郎」と連想する人はかなりたくさんいると思います。佐倉惣五郎は当然佐倉の人物だと考えている人が多いでしょう。しかし実際には、佐倉惣五郎の地元は現在の成田市だということをご存じでしょうか。

佐倉惣五郎の物語は、印旛郡公津台方村（現在の成田市台方）の名主木内惣五郎が、重税に苦しむ人々のために將軍に直訴し、願いは聞き届けられましたが、死罪になったというもの。のちに、宗吾靈堂（成田市宗吾）にその霊が祀られました。

このように、惣五郎は現在の成田市の出身です。「佐倉惣五郎」という名は、この地域全体が佐倉藩の領地であったために言われるようになったと思われます。



佐倉の昔話③

親はうま酒、 子は清水

直弥に「子は清水」と称する旧家がある。当家に昔、大変な孝行息子がいた。その父は大変な酒好きで、孝行息子は、いつも薪を集めてはこれを買ひ、酒の元手にあてていた。やがてこの真心は天にも通じたのであろうか。酒にかえる薪がなかったとき、門辺に湧き出る清水を瓢に入れて父にすすめたが、飲むほどに心地よく酔ってゆくのである。あまりの不思議に孝行息子が口にすれば、それはすばらしい涼水であった。以来、孝行息子は酒を買わず、父は常に心地よく酔ったといい、あの養老の滝の故事はここにもあったのである。この清水は今でも門口に残っている。

そして、これに似た話は、志津にも伝わっているし、印旛郡酒々井町や四街道市吉岡にもあり、いずれも等しく、親が飲めば酒、子が飲めば清水で、それぞれ清水の湧くところがある。

なかでも酒々井は「さかずきの井戸」と呼ばれ、そのため、この地を酒々井というようになったと伝えられている。



(佐倉市史編さん委員会発行「たんたん山」より)

佐倉の昔話④



仲の悪い神様

下勝田の鎮守は天満宮で、菅原道真を祭り、上勝田では大宮神社で雨鋤女命あめくわめのみことを祭っているが、両社はちょうど背中合わせに建てられている。

これは、この二神の仲が悪いからだというのが、その理由はまだ説明がついていない。

天神様がその競争者である藤原時平を祭るものと仲が悪く、通婚をさける等はよく聞くことだ。印旛郡酒々井町のあたりでは、もとはかなり広い範囲にわたって天神様を祭らなかつた。そのわけは、鎮守の宮が藤原時平で、天神のかたきだからというのであるが、どうして時平大臣を祭るようになったかはわからない。

寺崎では、道陸神どうりくじんとが仲が悪いのである。この道陸神は村はずれの道中に、いつも草履を片方だけ供えられており、弁天様はその下の方の水田の中に祭られている。これは、昔、道陸神が弁天様を大変慕ったが、弁天様は足の不自由な道陸神を嫌い、水田の中にいれば、その水口を飛びこえて来ることはできまいと、そこへ逃げてしまった。道陸神は弁天様の思ったとおり、足が不自由で水口を飛びこえることができないので、しかたなく道端で、弁天様の通るのを待っているのだというのである。全くほほえましい語り草である。

(佐倉市史編さん委員会発行「たんたん山」より)